

---

# カレナイハナ

海南

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カレナイハナ

### 【Nコード】

N1489R

### 【作者名】

海南

### 【あらすじ】

七つの星が降る夜に、枯れない花が咲くという伝説がある。その花を一目見ようと世界を旅する少女。枯れない花を咲かせるという使命を持った少年。七つの光を浴びて咲く花は、人の望みを叶えるという……。

## その花の唄

枯れない花を咲かせよう  
キミとボクとの心の橋に

少女は花を探してました  
久遠の花を探してました  
七つの星が降るこの夜に  
少女は花を探してました

枯れない花を咲かせよう  
キミとボクとの目印として

少年は花を育ててました  
永久の花を育ててました  
七つの光が生まれる夜に  
少年は花を育ててました

枯れない花を咲かせよう  
キミとボクとが出会えるために

キミとボクとが生まれるために

少女は花を見つけました  
久遠の花を見つけました  
少年が育てた久遠の花を  
少女は花を見つけました

枯れない花を咲かせよう

キミとボクとの約束の地に

少年は花を咲かせました  
永久の花を咲かせました  
少女が探した久遠の花を  
少年は花を咲かせました

枯れない花を咲かせよう  
キミとボクとが笑えるように

## 旅立ち

決して枯れない花があるという。

七つの星が降る夜に、光のように美しい花、その、決して枯れない花が咲くらしい。

心もからだ身体も、とうの昔に汚れきってしまったわたしは、決して枯れない、光のように美しいという花にとっても興味を持ってしまった。

いや、本当は興味なんて少しも湧いていなかったかもしれない。

ただ、もう、決して美しい花の道を進むことができないわたしは、美しく永遠に咲く花に嫉妬していただけなのかもしれない。

残りの人生、醜く散っていくわたしと、光のように輝きながら、永遠に咲くことのできるその花。

ただの嫉妬でも、何でも良かった。

一目見るだけで、満足できるなら。

その花には、もう一つの伝説があるらしい。

人の望み、願い事を

一つだけ、叶えてくれるという。

## 幸福の光

旅支度といつても、たいしたことはしない。

十日分の食料と、小さな寝袋。いろんなことをして儲けたたくさん  
の金。

それぐらいあれば、多分足りるだろう。

七つの星の降る夜というのが、今日を含めて七日間。

たったの七日間で、この広い世界を探して一輪の花を見つけるな  
んて。

無謀だ。

思わずため息が出てしまう。

少年は夜空を見上げていた。

一つの小さな種を握りしめて。

「幸福の光が、墜ちた」

少年の呟いた小さな声は風に乗って、消えた。

枯れない花を、咲かせよう

キミとボクとの目印として

キミとボクとが出会えるために

## 勇気の光

ガタゴトと、揺れる馬車。

一日目は、見事に花は見つからなかった。

「フウ……。ダメだったか」

町にいる人に、“枯れない花について、なにか知らないか”と訊いても、帰ってくる答えはたったの一つ。

「知らないなあ」

御者に訊いても、やっぱり同じ答えがかえってくる。

「そうですか……。ありがとうございます」

諦めようかという思いが、一瞬浮かんできた。

「ダメだ。そんなのは……！」

声を出して、この考えを振り払う。

諦めない。最後まで。

そう、最後まで。

それが、旅立った前のわたしとの約束。

光が、空に墜ちていった。

「勇気の光が、墜ちた」

少年は祈るように目を閉じると、呟く。

真っ暗だった闇は、光を受けて輝いた。

枯れない花を、咲かせよう

キミとボクとの記念の時に

キミとボクとが離れぬように

## 友情の光

歩くことに、疲れてしまった。

馬車から降りてからは、ずっと歩いてばかりだった。

それでも、しっかりと人に訊くことは忘れない。

「すみません」

わたしが話しかけた男性は、少し迷惑そうな顔をして、応えてくれた。

「なんですか？」

「あ、少し訊きたいことがあったのっで。“枯れない花”について何か知りませんか？」

すると、男性は一瞬驚いた顔になると、突然笑い出す。

「ハツハツハツ……。キミは本当にそんな花があると思っているのかい？」

「……そうですね」

わたしがそう答えると、男性は急に笑いを止めて、睨むようにわたしを見る。

「大人をあまりからかわない方がいい」

「！」

「ふざけていないのだったら、頭がおかしいんじゃないか？病院に行くことをオススメするよ」

見下すような視線。わたしはどうしようもなく悔しくてなにか言い返そうとしたけれど、

「わたしは」

「そんな花、あるわけないじゃないか」

「」

結局、なにも言い返せなかった。

「枯れない花なんて、あるわけないだろう。それは誰かが考えたフィクション物語……架空のものだ。ありもしないものを求めて旅を

しているなんて、バカげてる。そんな気狂いしたようなヤツとはこれ以上会話をしたくはないな」  
一方的に会話を終わらせると、男性はわたしに背を向けて歩きだした。

その背に、わたしは。

わたしは。

「わたしは！」

一瞬、男性の足が止まる。しかし、それだけだった。振り返ろうともせずに、また歩き出す。

「わたしは信じているんです！誰も信じていなくても。みんながわたしをバカにしても！世界中どこを探しても、信じている人がわたしだけだったとしても！！」

見えなくなつた背中に向かつて、叫ぶ。誰も聞いていなかったとしても、誰も聞く気がなかったとしても。

そして、

「わたしは……ずっと……信じているんだ……」

呟いた言葉は雫となって、頬を滑り下りて、溶けた。

月明かりが辺りを照らしていた。

そして、次の瞬間それよりも強い光が辺りに轟く。

「友情の光が、墜ちた」

少年は悲しそうな目のまま、光の消えるときを見つめていた。

枯れない花を、咲かせよう

キミとボクとの信じる道に

キミとボクとが触れ合うように

## 奇跡の光

困ったことに、お金が足りなくなってしまった。

思っていた以上に、物価が高かったのだ。

「どうしよう……」

カラに近い状態の財布を握り締めて、辺りをキョロキョロと見回す。  
お金を稼ぐ手立てはあるのだが、どうしても使いたくない手段だった  
たので、断念する。

「ねえねえ、もしかして旅をしている人？」

ガツクリと頂垂れているときに、いきなり後ろから肩を叩かれて、  
少し驚いて反応する。

「！……そうだけど」

見ると、同年代位の少女が、ニコニコと笑みを振り撒きながら立っ  
ていた。

「だと思った！！お金に困ってるの？泊まるところで困ってるの？  
だったらうちにおいで！！ちょっとだけど持成してあげる」

言うが早い少女はわたしの手を引っ張って歩き出す。

「え……ちょ……！！」

わたしの意見なんて、聞きやしない。

そしていつの間にかわたしたちは、お互いの名前を教えあうほど  
の仲になっていた。

「ねえ……。なんで旅に出たの？」

「う……」

きつと少女は何気ない気分で訊いただろう。でも、わたしは答えを  
言うのをかなりためらってしまった。

「バカに……しない？」

「うんしない」

間髪入れずに応えてくれた少女に少し安心感を覚えた。

ああ、この子だったら……。

「実は、わたしは“枯れない花”を探しているんだ。その花を見て、わたしが涙を流せるか、わたしの心の中に、まだキレイな部分が残っているのか……。それを確かめたくて、花を探しているんだ」  
一気に話し終えたあと、わたしはチラッと少女の顔を窺った。

「ステキ……」

予想していなかった言葉に、わたしは面食らった。

少女は、そんなわたしに気付かず、話続ける。

「ステキ。花を探して旅に出るなんて、あたしもできるようにになりたいな。……あたし、信じてるから。絶対、その花が見つかるって。絶対に、あなたが見つけてくれるって」

その言葉は、わたしの胸の中にスッと溶け込んで、隅々まで行き通るように広がっていく。

この子は、わたしを信じてくれている。誰も信じてくれなかった世界で、この子だけがわたしを信じてくれた。

涙が零れるのを必死に隠そうと俯くと、わたしの手を少女が無理やり握ってきた。

驚いて顔を上げると、少女はキラキラと輝いた笑顔で言うてくる。

「その花が見つかったら、あたしに教えてね。一番最初にね。真っ先に教えてね。絶対ね、約束だよ……？」

期待に満ちた、そんなキレイな瞳を見つめていると、心の奥がとても温かくなってくる。

それと同時に、チクツとした小さな痛みが、胸の中に広がっていくのも感じた。

それは、今までわたしを信じてくれた知人、友人、家族がいなかったからだろうか？

そう思うと、少女の輝いた瞳に対して、素直に頷くことができず、消えそうなほどに小さな声で、「うん……」と呟くことしかできなかった。

昼間のように明るい夜。

その明るさは、大きな光が地上に降ったせいであった。  
「奇跡の光が、墜ちた」

その明るい光が消えるその瞬間、そっと少年は囁いた。

枯れない花を、咲かせよう

キミとボクとの映った夢に

キミとボクとがまた会ったために

## 記憶の光

「本当ですか!!」

旅にでてから五日目。残り三日間というとても過酷な状態で、わたしはやっと“枯れない花”の手がかりを掴めた。

「ここから西に向かって二日間馬車に乗って、大きな川を二つ越えたところにある小さな町に咲くってという話を聞いたことがある」という話だった。

「ありがとうございます!!」

教えてくれた人に深々と頭絵を下ながら、わたしは頭の中でグルグルと考えがまとまらないままだった。

西?大きな川を二つ?小さな町?

なんとなく聞き慣れた単語を頭の中で何度も何度も繰り返していると、やっと一つのこたえ結論を見つけ出した。

「そこって……」

わたしの生まれ故郷じゃないか!!

まだ来ぬ待ち人を待つように。

少年は闇を見つめていた。

闇が光に変わる瞬間に、

「記憶の光が、墜ちた」

一言一言を刻むように、ゆっくりと少年は言った。

光はまた、闇になる。

枯れない花を、咲かせよう

キミとボクとの生きるりゆう意味に

キミとボクとが繋がるために

## 希望の光

跳ねる馬車、揺れる船。

その中でいろいろと考えていたが、どうしても納得のいかないものを感じていた。

なぜ、わたしはその事を知らなかったのか。

その“枯れない花”という噂も、もとを辿ればわたしの故郷から始まったそうさ。

なのにわたしは、つい最近知ったばかりなのである。

その噂はずっと昔から言われていたそうで、その街で生まれ育ったわたしは知っていてもおかしくはないはずなのだ。

町の人が、その話をしていれば。

「ああ。そうか」

町の人が、その話を信じなかったから、わたしみたいな子供までその噂は届かなかったのだろう。

その結論をだすと、ようやくわたしは納得できた。と同時に、なぜか昔のことを強く思い出してしまった。

気付いたときから親はいない。我慢できないことをたくさんやらかして、とりあえず生きていくような感じだった。

そんな古臭い思い出を掘り返していくうちに、いつの間にか出来たばかりの新しい思い出も、頭の中に浮かんでくる。

旅立ったときの情けない顔。情報が一切とれなかった日の不安な表情。信じているものを信じてもらえなかった悔しさ。分かり合えた喜び。手掛かりが見つかったときの嬉しさ。

旅に出るからもう六日になるが、そんな指を折り曲げて数えられるほど短い間にいろんな思いがわたしの中に浮かんで消えていく。そんなことを考えていると、決して楽しいわけではないのにフツツと笑い声が漏れてしまう。

こんなふうに、素直に笑えられたのは何年ぶりだろうか。

目の前にあるのは、小さな花の蕾。

その蕾を優しく撫でながら、少年は言った。

「希望の光が、墜ちた」

優しく撫でていた手は、少し震えて、止まった。

枯れない花を咲かせよう

キミとボクとのさだめ運命のように

キミとボクとが忘れぬように

## 生命の光

朝が過ぎて、昼の半分ぐらいが終わったころ。

「なんで……」

わたしはまだ、“枯れない花”を見つけれないでいた。

太陽が沈み始めて夜が近づいてくる。それまでに“枯れない花”を探し出さなければ。

七日間のうちでなければ、その花は見つけることができない。そしてその花は、何百年に一度しか咲くことができないのだ。

「早く……見つけなくては……」

辺りが暗くなつていくにつれて、不安はどんどん大きくなってくる。手当たり次第にすれ違つていく人に訊ねていく。そして、意味のない返事が返つてくる度に、苛立ちがどんどん増していった。

「ああもう！クソ！！」

どうしようもない怒りを壁にぶつける。痛む足などを気にせず、今さつき蹴った壁に背中を預けてしゃがみこむ。

わたしには、やっぱり無理だったのか……

ふと浮かんだそんな気持ち。それを否定する言葉がまったく出てこない。

とうとう真っ暗になってしまった。遠く離れた星が、弱々しく辺りを照らしている。群れからはぐれた一匹の狼が、夜空に向かつて遠吠えをしているのが、わたしには全然聞こえていなかった。

光の無い、真っ暗な闇の世界に突き落とされた気分だった。希望の光が全て消されてしまった。わたしの旅の意味は、何も無かった。俯いて、流れる涙を隠していると、

「……！！」

辺りが急に、明るくなった。

驚いて顔を上げると、目の前で大きな光が墜ちていくのが見えた。

「な……んだ……？」

光が墜ちるなんていう初めて見る光景に、呆然としていたが、自然と足が前へと歩み出す。

一步、また一步。

そして、走り出す。

あの光が、”枯れない花”と関係があるかなんてわからない。もしかしたら、全く繋がりが無いのかもしれない。

けれど、その光を信じていけば、きっと何か見つかる、そう思った。

希望の光が、見えたと思ったのだ。

そして、小さな丘のてっぺんに、光は墜ちた。

わたしも後を追ってそこに辿り着く。

目も眩むほどの眩しさの中、わたしが見たものは……

天使かと思った。

それとも、神様だこの世に忘れてきた、大切な宝物かと、思った。

それほどにそれは美しく、それ以上にとっても、儚く見えた。

最後の光が世界を照らすとき、少年の待っていた人が、息を切らしながらこの丘に辿り着いた。

そのことを確かめるように、少年はゆっくりと振り返って言う。

「生命いのちの光が、墜ちた」

少女の姿を確認した少年は、弱々しく笑う。

その手に、永遠の花を持って。

枯れない花を、咲かせよう

キミとボクとの約束の地に

キミとボクとが笑えれように

## その花の名は

「キミが来るのを、ずっと待っていたんだ」

目の前にいる少年は、そつと口を開いた。

その言葉が、誰に向けて物なのか一瞬分からなかったわたしは、

「え？」と小さく呟いて、

「わ……わたし？」

ようやく理解してからも、まだ、分からないことだらけだった。

「そう、キミを待っていたんだ……」

少年の寂しく揺れる瞳は、手の中にあるその花”枯れない花”に向けられる。

「キミのおかげで、この花は咲くことができた。心から感謝の気持ちを含めて……ありがとう」

少年が言った言葉の意味が理解できなかったわたしは、「は、はあ……？」と間抜けな声を出してしまった。

「わたしのおかげで……どういうこと？」

はてなと首をかしげているわたしをおかしそうに笑ってから、少年はわたしの知りたいことを教えてくれた。

「キミが、この花を探してくれたから、この花を見つけてくれたから、この花を繋げる人になってくれたから。この花は、安心して咲くことができたんだ。キミが、この花を未来に伝えてくれるから、だからこの花は咲くことができたんだ……」

それを聞いてわたしはとても焦ってしまった。わたしは、この旅が終わったら、またもう一つの旅に出るつもりでいるのだ。

もう一つの、もつと長く大きな旅に。

「だ、ダメだ！ そんなことは……わたしにはできない。

未来に伝えていくなんて無理だ！！わたしは

「この花はね」

突然、わたしの言葉を遮って少年は喋りだした。

「この花はね、永遠の花とも呼ばれているんだ。でも、永遠なんて、本当は存在しない。終わらないものなんて、なにもないんだ。だから、人によって永遠の永さは異なる。その人によって、その人の生命の永さは永遠の永さになるんだ」

「・・・・・・？」

少年の話し出したことがよく分からなくて、少し首をかしげていた。でも、少しずつ意味が分かってきて、驚きで目が見開いていく。

「キミの永遠は、まだ続くよね？自らの手で終わらせることなんて、しないよね？永遠に、ずっと輝いてるよね？」

この少年は、知っているんだ。

わたしの旅の意味を。

「人の生命は人の永遠なんだ。生命が続く限り、永遠は終わらない。だからこの花は、こう呼ばれているんだ」

少年はスツと手元の花に目を向けて、わたしの方に目を戻す。

わたしを見つけて、言う。

「永遠の花」

決して逸らさない瞳に、わたしは逃れることができなかった。

少年は知っている。わたしの旅の訳を。

この、”枯れない花”を見つけた後、わたしは

死に行くための、大きな旅にでるつもりなのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1489r/>

---

カレナイハナ

2011年10月28日12時26分発行